

Circle salamander in the circle

第二十六章

ジャガー狩り



峯村 明

Salamander in the circle

第二十六章の登場人物		
ダーヴェ	……	ネウトラ評議会・学術調査団の団長 上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員 民族・言語学者
ヤスウ	……	学術調査団の団員
イリチャ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた
マミヤ	……	ホシナ族の娘
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
バルダリス	……	メッサナの総首家の一人 臨時総督代理
コモラ	……	前総督バンテオラの顧問 最高賢者
メンドルブ	……	メッサナの化学者団の代表
バラム&バランケ	……	バンテオラが飼っていたジャガー

これまでの主な登場人物					
ネウトラ評議会	ハイアーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
		ゴン		ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)	
		サノヒコ		王に仕える役人	
		フツヌシ		王に仕える者 将軍	
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	ヴァリス将軍	レルの父		チドリ	アマセオの妻
	カール	王子 ヘルガの弟		ハマツ	チドリの養父
	ロウナス	国務省の高官		タマシギ	ハマツの息子
	アンデロ	レルの副官	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者	
	摂政	亡国王の弟	コタエ	"	
ケストル王国	ヘルガ	王女	スクナ	"	
	パウル	国王	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
	ウルリク	第三王子			
	ハンリク	ウルリクの息子	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
	ホベオクー	ケストル人の美女		メルノ	音楽家
黄金門市	ソルド	闘技場の警備隊長	冥界	冥界王	冥界の王
	皇帝	皇帝		ベネトナシュ	死神
バソネル	バイスロイの参謀	テクトリ		最下層ミクトランの主	
		プラトニオ		メッサナを追放された化学者	

目次

ジャガー狩り

404.

405.

406.

407.

408.

409.

410.

411.

412.

413.

414.

415.

第二十六章のあとがき

back number

奥付

ジャガー狩り

404.

空気が違う。ミクトランの冷たく乾いた肌触りとまるで違う。暖かく、しっとりとした夜風が吹いている。頭上に目をやれば黒い天井ではなく、金の砂を分厚くぶちまけたような夜空。天の川だ。

ヒューダーはぼつりとつぶやいた。「メッサナ——」

しかしそこがメッサナ市だとはにわかに信じられなかった。建物に使われている石材自体が淡く発光し、街全体が一晩中輝いていたかつてのメッサナ市ではない。寸分先もわからない夜闇に覆われている。

失われた。

そんな言葉が当てはまる。

夜目の利くジャガーたちは探検にでも出かけたのか、人間たちを残してとっととどこかへ行ってしまった。「薄情なやつらだ」、とバイスロイ。

彼らは呆然とそこに佇んでいた。何者かが——冥界の何者かが、一瞬で彼らを地上へ送り届けた。有無をいわせない強力な力で。そしてその直前に彼らは巨人が住む広大なすり鉢状の谷を、巨人が生み出される現場を見た。

地上世界を翻弄し、恐怖のどん底に突き落とした張本人たちを目の当たりにした。

それはどこか遠く離れた場所から送られてきた映像だったが、虚像ではなかった。非現実的な光景だったが、実在だった。

地上の人々が味わった恐怖に反比例でもするかのように、ミクトランの主らはあまりに

愚劣だった。彼女らは単に人間が持っていない大きな力を持っていただけなのだ。捕まえてみれば雑魚か。ヒューダーの胸中にそんな言葉がぼっかりと浮かんだ。のちのち悪夢となって眠りを苛むに違いない虚無は言いようのない嫌悪感だった。

ダーヴェは巨人が送り出されてくる源泉について様々にイメージしていたが、谷は、どのイメージをもはるかに超えていた。まさか広々と開けた空間で放し飼いにされていたとは。冥界の最下層ミクトランにそんな空間があったとは。そしてあの男は、そこを、工房と呼んでいた。冷や汗か脂汗か、暖かくしっとりした夜風に吹かれながら、ダーヴェは汗にまみれていた。悪夢から目覚めたら別の悪夢が待っていた心地だった。真に危険なのは“あの男”だ。イリチャをさらって行った、“あの男”だ。

405.

深夜の大通りを斑のジャガーが走る。バランケだ。バラムを闇夜の中に置いて一目散に坂道を駆け上がっていくと、目の前に壮麗なピラミッドが姿を現す。彼の住処、彼のテリトリー。

しかし、そこは見知らぬ匂いが充満していた。見知らぬ者たちが長い棒を手に、ジャガーといえども近づくの許さない。バランケは低く唸って抗議したが、いかめしい鎧を身につけた見知らぬ者が進み出てきて、長い棒の先端を、どん、と地面に突き立てた。

我が家に帰って来たというのに、こんな扱いが待っていようとは。そういえば見知らぬ匂いのなかにご主人の匂いがないと気づく。ご主人だけでなく、知っている匂いがひと

つもない。ご主人はもういないのだとバラムが言っていたが、バランケは真に受けていなかった。太陽のように偉大な、慈愛に満ちた美しいパンテオラ様がないなど、あろうはずがなかった。

衛兵が威嚇してこないところまで退いて、そこでさんざんうろうろしてから、とぼとぼと来た道に戻って行く。円い耳も、長いしっぽもしおたれ、まるで負け犬のようだ。躍動する精悍な戦士の面影はもう、微塵も見当たらない。

バラムは暗闇に潜むようにして弟を待った。彼自身、パンテオラの不在を知った時は堪えたが、打ちのめされた弟を見るのは同じくらい、いや、その何倍も辛いのだと知った。

低い遠吠えで弟を呼ぶ。バランケはとぼとぼと近づいてきて、二頭は鼻面を突き合せ、遠吠えの合唱を始めた。

それはメッサナの町を流れていき、やがて町中に伝播した。町中のジャガーの遠吠えを誘ってしまったのである。ネコ科の動物の遠吠えは発情期くらいのものだが、今宵のそれはそういう悩ましいものではなかった。喪失の哀しみに満ちていた。

眠れぬ夜の床で寝がえりを繰り返していた人々はジャガーのただならぬ啼き声に胸を締め付けられ、共に泣いた。

彼らの主はもういない。遠いところへ行ってしまった。

406.

(どうしたの?)

マミヤは豪華なベッドの上に上半身を起こした。

(ジャガーが泣いてる……メッサナ中のジャガーが……)

豪快で神々しい彼らを目にする機会があるだけに、胸がはり避けんばかりのその泣き声は聞く者の心をかき乱し、マミヤの身を震わせた。思わず両手で面を覆い、枕に倒れてしまう。かつて世界の果ての島の険しい山中を、日焼けした手足をさらして駆け回っていた少女からは想像もつかないほど女らしい仕草だった。

思えば、故郷を離れ、見知らぬ異郷の地にあっても泣いたことなど一度もないマミヤだった。泣くどころではなかったというのはある。いきなり異国の貴人、エウメロスのヘルガ王女の世話を仰せつかってしまったのだから。

(ヘルガさまのおかげで泣かずに済んだのよね……あれからどうされたかしら、お元気かしら……レル……コタエさま……イリチャ……ヒューダー!)

故郷のことは一つも思い出さないが、懐かしい人たちがあとからあとから脳裏にあらわれてひとしきり彼女は泣いた。

(逢いたい……ヒューダー……)

*

ひとしきり泣いてからおもむろに起き上がり、ベッドから出、寝間着のうえに薄物を羽織ってテラスへ出てみた。

「なんだ、おめえも眠れねえのかよ。まったく、うるせえよなあジャガーども」

「ヤスウ……」

このひとはべつにどうでもいいのよね、とマミヤは思う。というより、顔を見ただけで感傷的な気分がきれいさっぱり消えてしまった。

(もう一回寝よ。夢の中でヒューダーに会うんだもん)

きびすを返そうとするが、なぜか体が動かない。なにかが気になるのだ。

「おや！ これはふたりの逢引きをじゃましてしまったかな？」

「こんどはコモラさんか。逢引きって。やめてくれよ、そんなんじゃねえよ」

「ははは。しかし、妙な晩じゃな。一度眠ったら死んだように眠るわしが、こんな夜更けに目が覚めてしまったんだから。これこれ、マミヤ、どこへ行く？」

「ちょっと、そとへ」

「おお、わしも行こう。ボディガードじゃ」

「おれはもうひとねむりする。耳栓して寝る」

407.

ヤスウはそのへんにいるだけで騒々しくてうっとうしくてたまらないが、コモラはむしろ気持ちが落ち着く相手だった。ほんとうは一人になりたかったのだけれど。

「今宵の天の川はひとときわ見事じゃなあ！」

「ほんとですね」

ふたりは空を見上げながら言葉少なに庭園を歩いた。さやさやと棕櫚の葉擦れ。ジャガーの遠吠えはいつのまにか止んだようだ。

ふと、コモラは視線を下ろした。なにかの気配を感じたのだ。

あの晩と同じだ。夜陰になにかがうずくまっている。それは――

「バラムではないか!？」

のっそりと黒い影が立ち上がり、植栽の陰から出てきた。

「バラム、やはりおまえか! どうした、なぜそんな目をする――まさか――ダーヴェーやヒューダーになにごとかあったのでは――」

マミヤの脚は何かに導かれるように動いた。そとへ、パルダリス邸の外へ。

正門の外で、夜営たちが数人集まって同じ方角を注視していた。

「どうしたの」、と声をかけると、夜営のリーダーが手をあげてマミヤを押しとどめようとした。「お戻りください。塀のなかへ。屋敷へ。なにやら様子がおかしいのです」

マミヤは屈強の夜営たちを押し分け、するりと前へ出た。そして夜闇にじいっと目を凝らす。

夜闇の中に何か動いた。人影のようだ。それもひとりではない。――三人？

夜営たちは緊張し、マミヤの疑いに満ちた両目が見開かれた。そしてその唇から喘ぎがもれた。

まさか！ まさかあれは！

(ヒューダー？)

マミヤの口からもれた小さなつぶやきに反応するように、闇のなかの三人の歩みが止まった。

「マミヤ？」

懐かしい、懐かしい声！ いつも体の中に響いていた声！ いっときも忘れたことなどなかった！

ふたりは双方から駆け寄った。夜営が止めるいとまもなかった。

「ヒューダー！！」

「マミヤ！！」

パルダリス邸の門前で、ふたりは呼び合い、その手で相手の存在を確かめた。

「オデレータ！」

何語かと思ったら「驚いた」が訛っている。ヤスウだから。

彼は呆然とし、照れ隠しなのか、駄々っ子のように周囲をなじった。

「目が覚めたら先生もヒューダーもそこにいるんだもんなー。いつ帰ってきたんだ。なんで起こしてくれなかったんだよお」

「そんなわけないでしょ！」

マミヤがピシヤリと言う。「みんなで寄ってたかって叩き起こそうとしたわ！ そしたら『もう食べません』とか、むにゃむにゃ言ってたのは誰よ！！」

まだ暗いうちにパルダリス邸のスタッフたちに総動員がかけられ、帰還した三名は風呂に入れられ、少し眠った。少しどころか幾日も眠れそうなほど疲労がたまっていたが、現在の有力者の耳にいれておくべきことがいくつもあった。

ヤスウが起きてきたのは、彼らが朝食のテーブルについているときだった。彼らの無事の帰還は喜ばしいにちがいがなかったが、その顔ぶれを見たヤスウの胸に疑念が沸き起こったのはいうまでもない。ひとり、見たことのない、態度の大きな男がいる。そして、イリチャがいないのだ。

マミヤが気づいていないわけがないのだが、三名の帰還者はわざとのように話題にしない。それはかえってイリチャに何か起こったのだということを暗示していた。

409.

現総督パルダリス相手に、巨人族調査団長ダーヴェェはミクトランでの顛末を語った。

巨人族による被害をまったく受けていないメッサナの総督に語るのもおかしな話ではあったが、ダーヴェたちが直属するネウトラ評議会は消失し、黄金門市も破壊された今となっては、もっとも権力を持つ存在はパンテオラの跡を継いだパルダリスだった。

外界から完全に遮断されたメッサナに外の情報はまったく入ってこないから、評議会が巨人族殲滅の目的で造った爆弾がアトランティス大陸のほぼ全域を巻き添えにしたことを、パルダリスたちはミクトラン帰りのメンバーから聞くことになった。

「それ——原子爆弾でやつだ——」

ヤスウが受けた衝撃は計り知れない。顔は土気色になり、言葉が出てこない。ヤスウともあろうものが、言葉が出てこない。

「評議会が自力で造れないもんだからメッサナの化学者団に協力してくれって持ち掛けてきた。そしたらメンドルプ博士が烈火のごとく怒り狂って。ぜったい造っちゃだめなやつなんだって」

「メッサナの化学者団は危険なものだと知ってたというのですね」、とダーヴェ。

「ええまあ、危険というか、ここメッサナからずっと東の方にオクロって場所があって、そこの地下のウランという物質が地下水と反応して自然に大きなエネルギーを出してた。なんだっけ、原子核分裂とか言ってたな、それが二億年も前から数十万年続いたっていう。（第二部 #162参照）

さすがの巨人族もそこにだけは近づかなかったっていうんだ。評議会のティコ博士はそこに目をつけた。自然にできたものなら人工的にも作れるだろうと考えたのさ。

まあ、ちょっと考えりゃ、巨人にあぶねえんだから、人間にだってあぶねえだろってわかりそうなもんだ。

でも、評議会じゃあ、メンドルプ博士に頭っから突っぱねられたもんだから、考え直すどころか逆に暴走して強力な爆弾にしちまったんだ」

「ティコ博士ですか。とても有能な人でしたよ。とくに治水の分野で大きな実績をいく

つも残している」

「それだよ、ダーヴェ先生。でかい成功体験持ってたもんだから、人工の原子核分裂で巨人をやっつけられるって思いこんじまったんだ、ティコのやつ」

「評議会本部も巨人に襲われたんだ。適切な人材がいなかったんだろう」ヒューダーはため息とともにつぶやく。

「だよな。“人”がいなかったんだ。でさあ、メンドルフ博士が猛反対した理由がさ、生き物にとって危険だからってだけじゃないんだ。原子核を分裂させるってことはとんでもなくおそろしいことなんだとか」

「そうであった。あの時博士は真っ青になって震えておられた」、とパルダリス。

「結果、大陸全土を汚染してしまい、この先数千年は人が住めないというのですから、たしかにおそろしいということはわかりますが……」

「……原子とは、神々の秩序の法則、人類のための摂理、その設計図を圧縮したものと……」

ダーヴェは目を見開いてパルダリスを見た。

「この世界はその設計図をもとに構築されていた——」

410.

メッサナの空は抜けるように青い。大陸全土が汚染されてしまったとは想像もつかない美しさだ。

何かが……それとも誰かが……メッサナを護っている、とは思えない事実が一同の心を曇らせる。メッサナの封鎖はおそらく本家アンベレオ王の行幸と関係があるからだ。

パルダリス邸の門前で、帰還者が三名だと知ったとき、マミヤはイリチャがいないことに気がついた。

なぜ？

ヒューダーはダーヴェェを追い、イリチャはヒューダーを追ったのだ。ならば三人目はイリチャであるはずだ。だが、ちがう。三人目は黒髪の成人男性だった。小柄できゃしゃな白髪の少年ではなかった。

なぜ？ 知らず知らず、咎める思いでそのバイスロイという男をみてしまうマミヤだった。相手のバイスロイも少女に歓迎されていないことを感じとっていたが、はたと思い出した。この少女はあの時の……

それでバイスロイは……めったにしないことだが……自分から話しかけたのだった。

「そなたはエウメロスのヘルガ王女の侍女をしておられたのではないか？」

マミヤは少し驚いて相手を見つめた。

「私の名はバイスロイ。そなたとはケストルですれ違った。私はそのとき、王女奪還のために、王女の婚約者として、エウメロスの人々と共にケストルに入ったのだった」

「ヘルガさまの！？ 婚約者！？ あなたが！？」

「まあ、王女を取り返さぬことには我々は身動きができない状況だった。婚約者だというのはケストルに対する圧力というか。方便というか。政治上の駆け引きだったのだ

が」

「……あたしたち、ケストルを発ってエウメロスに向かう途中でケストルの航空機に襲われたんです。でもエウメロスの空軍の人たちが助けに来てくれて……ヘルガさまはそれからエウメロスへ、あたしはメッサナへ。そうやって別れたんです」

「なるほど……ではケストル王国が滅びたことは？」

＊

「信じられません——」

マミヤはケストルーエウメロス国境の山岳地帯からメッサナへやってきた。それからわずかの間にケストル王国がなくなってしまったとは。あのケストル王国が！？

「信じられないのも無理はない。予想もしないことが起きた。ケストル消失はほとんど人為的な災害によるもの、ヘルガ王女は災害がケストルを襲う可能性を知って、人々を助けようと自分から、再び、ケストルへ向かった」

事実は多少違うのだが、少女の真剣な目を覗きこむうち、バイスロイはそれこそがヘルガという人の、人となりだ、と気がついた。

「災害は人の手でどうにかなる規模のものではなかった。しかし王女は少しでも人命を助けたいという、己の危険を顧みないひとだった。じっさい、ケストル人の一部は逃げ伸びたはずだ。私はそのまた一部に過ぎない。王女に助けられたのだ」

マミヤは感極まり、片方のこぶしをもう片方の手で包んで口元に当てた。目には涙があふれた。

「エウメロスの人々は巨人族を逃れ、地下へ潜った。安全な場所だ。王女は仕事を終え、無事に帰郷し、今頃、民たちに囲まれておられる」

それは確かめるすべを持たないバイスロイの願望だったが、心から望む願望だった。

「ほんとうですか!？」

「おそらく」

「ヘルガさまはご無事なんですね!? エウメロスの人たちも!? よかった——!」

マミヤは指先で涙をぬぐった。清潔な涙だった。こんな少女に咎めの目を向けられるのはたまらないとバイスロイは思った。誤解は少しでも避けたかったのだ。そして彼は今になって、自分はその姫君の人となりを尊敬していたのだと気づいた。

「ありがとうバイスロイさま! それで、あの、イリチャのことはご存知ありませんか?」

涙を振り払った黒い目を向けられ、バイスロイは困った。彼もまた巨人族の体の破片から巨人族が造られる現場を見た。それがひとりの男が見つけた“否”の言葉のもとに文字通り否定される場面を。イリチャはおそらくその男に連れ去られた……それがいったいなにを意味するのか……

しかたなく、バイスロイは正直に思うところを述べた。わからない、と。

大胆な幾何学模様を彫刻した白いライムストーンの渡り廊下で、バイスロイはヒューダーをつかまえた。

「イリチャのことをマミヤになんと説明する!？」

ヒューダーは泡を食っている様子のバイスロイを物珍しくながめた。

「……ありのままに言うしかあるまい。貴殿、なにか聞かれたのか？」

「聞かれた。わからぬ、と答えておいた。それと、貴殿はやめてくれ。おまえとかあんなとか呼ばれる方が気が楽だ」

「そうか……すまん、貴……あんにまで気を遣わせることになるとはな」

「そんなことはどうでもいいが。そう……言葉を選ばずに言わせてもらおうが……イリチャは死んだ、というならいい。しかしそうじゃないだろ。あの男は何者だ。なぜイリチャを連れて行った？ なんのために？ イリチャをどうするつもりだ？ 嫌な予感がするのだ。あの男の力を見ただろ。あの男の破壊力を。そりゃあ、巨人族の源泉を潰してくれたことは、我々にはとんでもなく好都合だ。が、あの男は同じ力でイリチャを壊してしまうかもしれん——」

ヒューダーはぞっと鳥肌だつ思いで黄金門の貴公子を見返した。彼の語る言葉のなかから以前、同じようなショックを受けたことを思い出したのだ。何だったろう……？ たしかあれは……メルノの音楽がなぜ心を揺さぶるのかという話のなかでのことだった。

『揺さぶられた魂とはすなわち人間の本質部分。本質を生きることは生命の本来の欲求であり目的であるはずではないか』と、バイスロイは言った。それを聞いてヒューダー

は、人間が本質を生きることを望まない存在がメルノを排除したのではないかと、そう思い至ったのだ……

ああ、と、ヒューダーは胸中で呻いた。なんということだろう。バイスロイという男は脈絡もなく彼の前に現れたのではなかったのだ。バイスロイがその魂のレベルで繋がりをもつメルノを護っているのは、イリチャの母親なのだ。

ことここに至って、相手を心配させまいという心遣いから結局相手を欺くことになったとして、それがなんになるだろう。

本当のことを、打ち明けよう。たとえ相手が、知らなければよかったととらえたとしても。マミヤにはむろんのこと、そして……

「バイスロイ、聞いてくれ、おまえに話しておきたいことがある」

412.

「やってしまったのだな」、というのがメッサナ化学者団代表メンドルプの第一声だった。その表情は怒りと哀しみとに引き裂かれていた。このひとのこんな顔は見たくないと、ヤスウは思った。メンドルプにはおおらかで明るい笑顔こそが似合うのだから。メンドルプにこんな顔をさせる者は許せないとさえ、ヤスウは思った。それほど、彼はこの老化学者を愛していた。

メンドルプの怒りは評議会に対するもので、哀しみはミクトランに墮ちた化学者に対するものだった。

「プラトニオが……」、と彼は絶句した。その落胆ぶりから察するに、メンドルプが彼に寄せていた期待がうかがわれるというものだった。多くは語られなかったがプラトニオは相当に優秀な化学者だったようだ。その力を正しい方向に活かsetらばどれほど人類のために貢献できただろうという。

メンドルプはひとこと、「彼は自意識が強かったのだ」とつぶやいた。メンドルプとプラトニオは並んで化学者団代表の候補に挙がり、プラトニオは代表に選ばれようと不正を行ったのだという。彼の老師はそのことを恥じてメッサナを追放した。前代未聞の醜聞として関係者はみな口をつぐんだというのだった。

失意のメンドルプを、ヤスウは慰める言葉も思いつかなかつたし、そんな立場ではなかった。ネウトラ評議会の“やらかし”はそれこそ前代未聞だったのだから。

「できることなら」、とヤスウはつぶやいた。「もみ消してえですよ。後世に残らねえようにね」

まったくだ、とヒューダーは黙ったまま同意する。マントを頭から引っかぶって知らんぷりをすべきなのだ。しかし、彼らの性格と、歴史の流れは結局それを許さなかった。

しかし、メンドルプが再起不能と思われる打撃を受けたとしても、ダーヴェは彼に確かめなければならない。

「アンベレオ王がメッサナを訪問するとか。その真の目的は？」

「真の目的——言わずと知れたこと。あなたは、ダーヴェどの、すでにご存知である？」

「やはり。そうなのですね」

アンベレオ王の狙いは、黄金なのだ。

413.

巨人族という禍根が絶たれたことは大きな前進だった、に違いない。が、そこには達成感も勝利の歓びもなにもなかった。被害に遭い、家族知人友人同僚、故郷を失った者にとって大きな前進でなければならないのに。彼らが抱えたのは喪失感、そして、敗北感だった。

なんということだろう。

なんということだろう。

ただ救いは多くの者が地下へ逃れているということだ。人類は敗北したわけではない。黄金門の皇帝がリーダーとなって地下へ逃れた人々を地下都市トゥランへと導いている。けっして敗北したわけではないのだ。

が、地下へ向かおうにも完全に封鎖されてその手段のないメッサナにいるかぎり、それは他人事だ。

ここにおいて、悪夢の次の章が始まる。

メッサナにいる人間はみな失調し始めていた。喪失、敗北、後悔の念は引きずるほど精神の健康を蝕む。ミクトランに数か月滞在して平気な顔をしていたダーヴェたちでさえ例外ではなかったし、ジャガーたちも例外ではなかった。

目の覚めるような青空を戴く常夏のメッサナは実は閉ざされた牢獄だったのだ。

414.

バラムは弟バランケの様子がおかしいことに気づいていた。バラムはダーヴェを、バランケはヒューダーを主人としてそれぞれ認識していたのだが、メッサナに戻って以来、ヒューダーの人間関係に大きな変化があった。マミヤという少女の存在である。

ヒューダーと少女マミヤが強く惹かれ合っているのはバラムの目から見ても一目瞭然であったから、バランケが気づいていないとは思えなかった。ヒューダーたちにそんなつもりはなくてもバランケは遠慮して主人に近寄らなくなっていったようだ。

バラムがダーヴェやコモラのお使いとしてあちこち走り回っているうちに、バランケはときおり姿を消すようになった。ヒューダーとマミヤは驚いてバランケの名を呼び、探して回り、そのたびバランケはどことなくきまり悪そうにとことことやってきた。そしてある日、ついにバランケは呼びかけに答えなかった。

415.

その日の朝、パルダリスは苦虫をかみつぶした、男前台無しの顔で、居候している一同の前に現れた。

本国からの通達だという書類を不機嫌にわしづかみにして。

「しょくん、さわやかな朝にまことに申し訳ないのだが、聞いてくれたまえ。こうだ。ジャガーを一頭残らず供出せよというのだ！ 一カ所に集めてくのが管理をするのだそうだよ！ こんなことは……前代未聞だ！ 我々の友人をだぞ！ 管理すると！ ばかばかしいにもほどがある！」

一同は顔を見あわせ、その視線はいっせいにダーヴェの足元に寝そべるバラムに向けられた。

パルダリスは情けない顔でさらに続けた。「本日正午から一軒ずつ回って、ジャガーをあずかるという。隠すと罰則がある。逃がすのは物理的に不可能だし」

「一種の人質ですか」コモラがぼつりと言った。

昼過ぎにさっそく役人がやって来た。大型の農耕用の車の荷台には鋼鉄製の檻が乗っていた。すでに何頭か先客が納まっている。どの顔も不安げだ。こんな扱いを受けたことはないのだから、当然だろう。

バラムは抵抗もせず悠々とした態度で檻に乗り込んだ。まあ、彼がその気になればこんな檻など簡単に破ってしまうだろうが。

役人は、もう一頭いるはずだ、という。なぜそんなことを知っているのか不思議だったが、屋敷の執事が前に出て、もう一頭は数日前に病気で死んだのだと説明した。役人

は納得したようなしないような顔をして、書類になにやら書き込んでいた。

執事は、ジャガーたちはどこに集められるのか、会いに行けるのか、尋ねたが役人の答えは要領を得なかった。彼ら自身知らないのかもしれない。

マミヤも、ヤスウも動揺した。ダーヴェもヒューダーも顔には出さなかったが態度は固かった。

まさかとは思うが、バラムには二度と会えないかもしれない、そんな予感を彼らは胸のうちに抱いていた。

第二十六章 『ジャガー狩り』

第二十七章へ続く

第二十六章のあとがき

※・Pubooさんにはコメントを受け付ける機能がない…それはそれで気楽だったのですが…一方通行もナンだと思ひまして、勝手に拍手ボタンなるものをつけてしまいました。ミネムラ個人のところへ直接届きますし、お名前必要なし、足跡なんか残らないつくりになってますので安心して使ってやってください。

(↑ 一時設置したのですがうまく表示されなくなってしまい、筆者力不足のため復旧諦めました。使ってくださった皆様にお礼とお詫びを申し上げます。 2024年3月27日)

第六部に突入。

「捕まえてみれば雑魚か」

このセリフは、ご存知の方はご存知の、あの……

仲間を思い、苦悩して苦悩して、ようよう犯人を捕まえてみたらとんでもない小物だった、という。状況はまるで違うものの、この場面ではぴったりだと思われたので、使わせていただきました。

パルダリスもパンテオラもネコ科はヒョウ族に関係する名前です。ジャガーの親分みたいな感じ。

さて。今回の話とはあまり関係ないですが。

人間同士の争いはその原因が別の次元にある場合、人間が解決することはできない、というようなことをずいぶん前にシュタイナーの著作のどこかで読んだことがあります。連日トップニュースで扱われている大事件に、その言葉が思い浮かびます。これはそういう類の争い？ ならば終結はないということ？ 解決できない？ なぜ人が人を傷つける？ なぜこれほど残酷なのか？

疑問は尽きない。そして“本当”は何が起こっているのか知りたいと、そう思うのです。

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようとして画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナを抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていたどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

『第二十五章 イリチャの行方』

ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチャは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチャだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチャは激しく落胆する。

奥付

Salamander in the circle

第二十六章 ジャガー狩り

2023年11月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D&R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) [イラストAC](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
